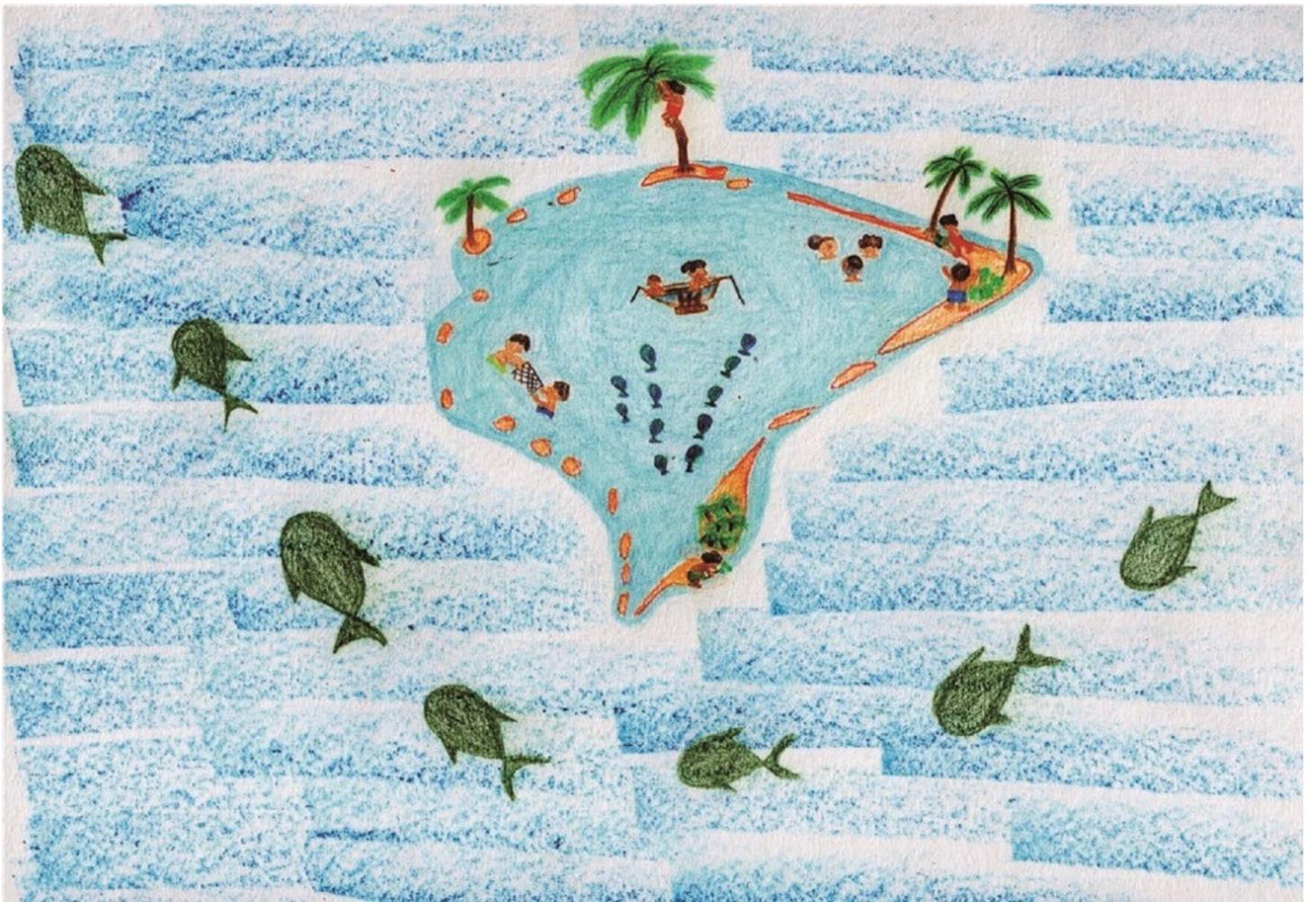


笑顔の島の作り方



空の星たちがサンゴたちのおちてきて、小さな星の砂になりました。



いつもいつも夏の島がありました。

いくつもの島がつながって輪っかになり、青い海の上で浮かんだネックレスのようです。

輪っかのナカの海からソトの海まで、歩いてほんの50歩ほどです。深く荒々しいソトの海。浅く穏やかなナカの海。たくさんの魚が群れ泳ぎ、砂浜にはココナツの木が立ち並んでいます。

島の人々は、わずかに生えるタロ芋やココナツを育てて、みんなで分け合い、助け合って暮らしていました。

笑顔と歌声が絶えることのない、そんなすてきな島でした。

アガサは小さな女の子。 この島が大好きです。
毎日、なかよしのニワトリや犬とおしゃべりをしたり歌ったりするのが、
楽しくってしかたありません。



島の子供たちといっしょに、ナカの海で小魚たちと追いかっこをするのも大好きです。でもいちばんのお気に入りには、静かに笑っているだけのサンゴや星の砂たちに囲まれて過ごす時間でした。



しかし大人達のなかには、今の暮らしに満足できず、もっともっと食べ物が欲しい、と願う者達がありました。

なかでも、食いしん坊でいばり屋のサニパルトは、自分だけの畑が欲しくてたまりません。

好き勝手に使える自分だけの土地を手に入れようと、いつもたくらんでいました。



強い西風が一日中吹き荒れた日のことです。

大人達が海岸に集まっています。

ずるがしこいサニパルトは、大きな波を指さして言いました。

「この波を見ろ。島を削っているじゃないか。

嵐なんか来たらひとたまりもないぞ。

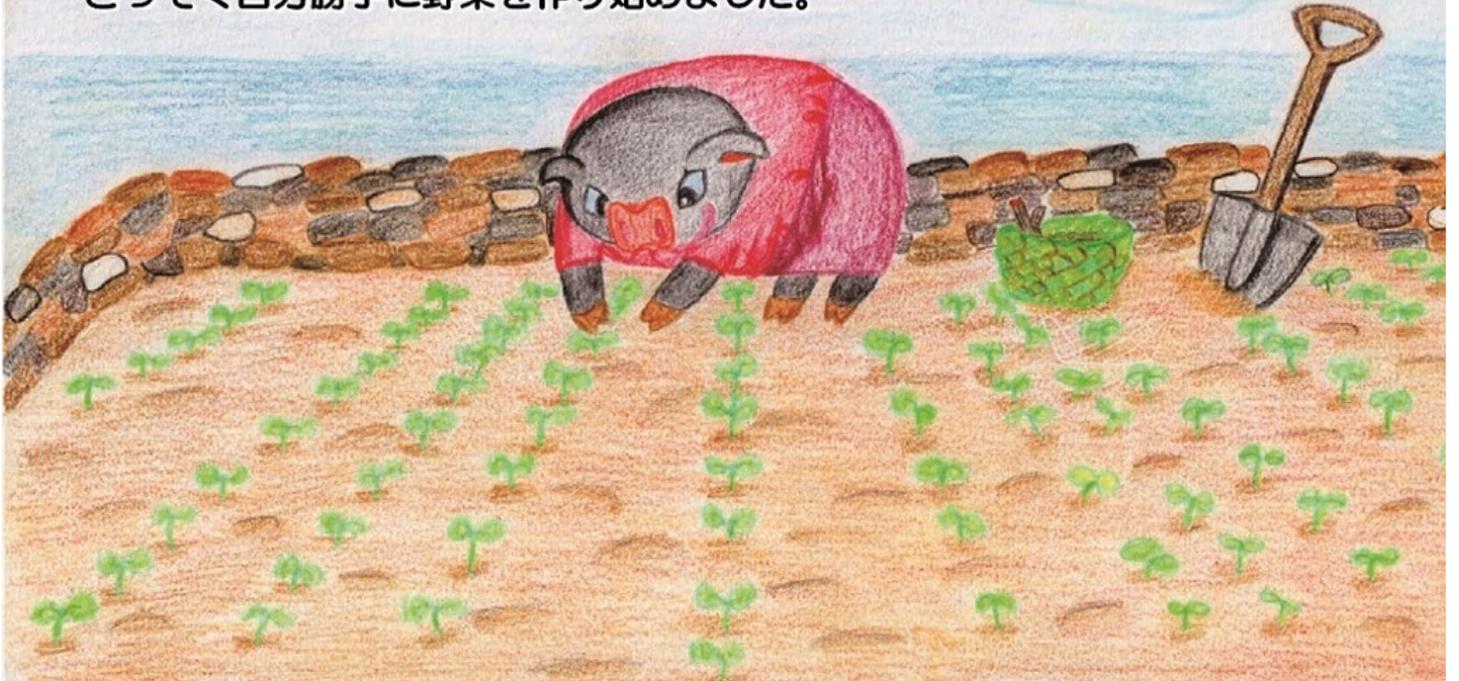
海にいくらでもある石を使って、
波に負けない頑丈な石垣を作ろう。」

波に削られる海岸を見た大人達は、

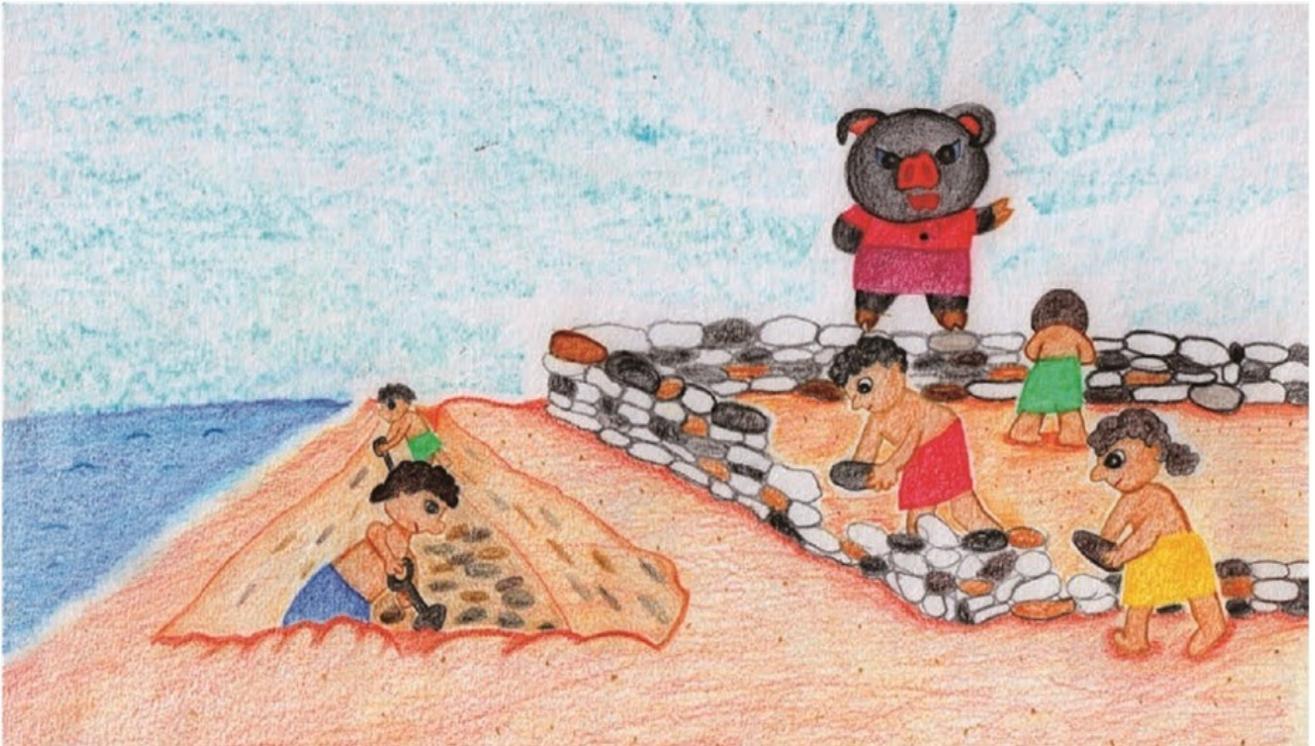
サニパルトの言葉に反対しませんでした。



こうして、サニパルトは石垣づくりにとりかかりました。ナカの海の石をほり出しては浅い海をどんどん埋めたてて行きます。そしてできあがったのは、石垣で囲まれた畑でした。サニパルトは自分だけの畑ができて大喜びです。さっそく自分勝手に野菜を作り始めました。



最初はただ見ていた大人たちでしたが、サンパルトの野菜にひかれ、手伝うものも出てきました。そしてサンパルトの畑は、ナカの海を埋めながらどんどん大きく広がっていったのです。





しかし石をとられ深くほりおこされてしまったため、
ナカの海はよどんでにごってしまいました。

魚達は逃げだし、動けないサンゴは死んでしまいました。
星の砂ももう笑ってはいません。

サニパラトは、食べ物目当てで何でも
言うことを聞くようになった大人達を
従えて、すっかり王様のようにいばっ
ていました。

日がたつにつれ、島のあちこちでおかしなことが起き始めました。
大きな波がきては、サニパラトたちのつくった畑のまわりをけすっていきま
す。あの穏やかだったナカの海から、大きな波がやってくるようになったの
です。



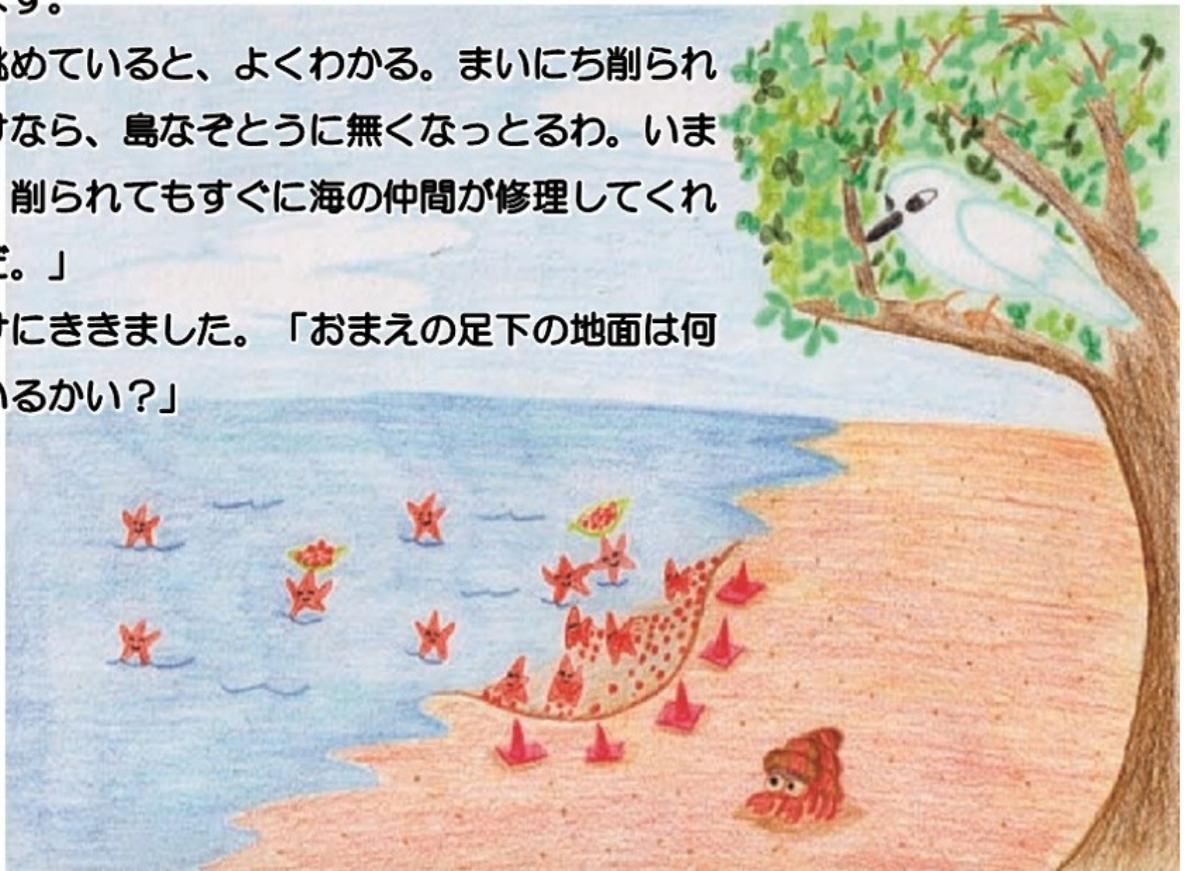
魚たちは教えてくれます。「海を掘る前は、こんなに大きな波は来なかったよ。」「浅い海だと、波も小さくなるのにね。」
でも小さいアガサにはよくわかりません。



鳥も言います。

「空から眺めていると、よくわかる。まいにち削られていだけなら、島なぞとうに無くなっとるわ。いままではな、削られてもすぐに海の仲間が修理してくれていたんだ。」

鳥はアガサにききました。「おまえの足下の地面は何でできているかい？」



アガサはそのときに初めて、砂に見えるのは星の砂で、石に見えるのはサンゴのかけらなのだと気がつきました。島は、あの静かに笑っているだけの海の仲間のかけらが積もって出来ているのだと。

島がなんでできているか気がついたアガサに、鳥は言いました。

「星が降り積もって島ができたという古い言い伝えを、みながどれほど理解しておるかのう。」

小さいアガサは、考え込んでしまいました。



風が変わりました。嵐です。

空は一面の黒い雲で覆われ、波はみるみる大きくなり島に打ち寄せます。

ココナツの葉っぱがちぎれんばかりに風になびいています。

島の長老が言います。「安全な場所に逃げるのじゃ」

誰もが、これまで波が来ても大丈夫だったサニパラトの畑に向かいました。

でもなにか変です。頑丈な石垣には、見たことのない恐ろしい大きな波が打ち寄せています。

「この畑はわしが考えたものだ。だからわしのものだ。手伝いもしなかったおまえらは出て行け。」いばったサニパラトを先頭に、欲張り連中が立ちふさがってしまいました。



追い出され、仕方なく他の場所を探すアガサ達に魚が教えてくれました。

「波が小さくなる場所に向かって！」

「サンゴや星の砂達がたくさんいる海のそばに隠れて！」

嵐はますます激しくなるので、島が沈んでしまうのではないかと皆がおびえています。

アガサは、鳥の言葉を思い出しました。

「北に行きましょう。ずっと昔から島を守ってきた、海の仲間達が元気な北に行けば、みんなが力を貸してくれるわ。」

誰よりも海の仲間達と親しかったアガサの言葉です。皆は島の北の端に向かいました。





北の端にようやくたどり着いた時、風はますます吹き荒れ、根を張ったココナツにしがみついていないと飛ばされそうな勢いになっていました。真っ暗でなにも見えません。皆で固まっていたましたが、ついに波が体を洗うようになってきました。



そのころ、これまで耐えていたサニパルト達の石垣が、とうとう壊れ始めました。

でも欲張りなサニパルトは、自分の土地を離れることができません。

「いやだー この畑は手放さんー」

そのとき、見たこともない大きな波が、石垣を越え、畑を飲み込み・・・。



どれくらいそうしていたでしょう。
動物たち、アガサたち、島の長老たちが気づくと嵐がやんでいました。
不思議な光景でした。

分厚い真っ黒な雲が、低いところをぐるりと囲み、なのに真上にはまん丸なお月様が輝いています。そして皆の前には、初めて見る大きな島が明るく照らされて浮かび上がっていました。

島の長老がぼつりつつぶやきました、

「嵐の後に島が出来ると聞かされたことがある……。」

となりの小島が、大きな島になっていたのです。

しかも目の前に、その島までつながる細い道が白く輝きながら延びていました。

見とれていると、再び風が吹き始め、周りの黒い雲がぐんぐん迫ってきます。

どうやら巨大な嵐の目にすっぽりと入っていただけのようです。

再び嵐が来ます。

アガサ達は大きくなった隣の島に向かいました。

突然に出来た細い道を通して・・・。



朝が来ました。ナカの海は鏡のようです。

アガサ達は大きくなった隣の島で無事に嵐をやり過ごしました。

「見て。海の仲間が地面を新しく作ってくれたのよ。」アガサの言うとおりです。新しい陸地はサンゴや星の砂達でできていることが、はっきりとわかりました。海の仲間が作りあげ、浅いところにため込んでいた砂や岩などが、大きな嵐によって打ち上げられ島となったのです。

いつもアガサ達を守ってくれていたのは、あの静かな海の仲間だったということが、皆の心にもしみ渡りました。





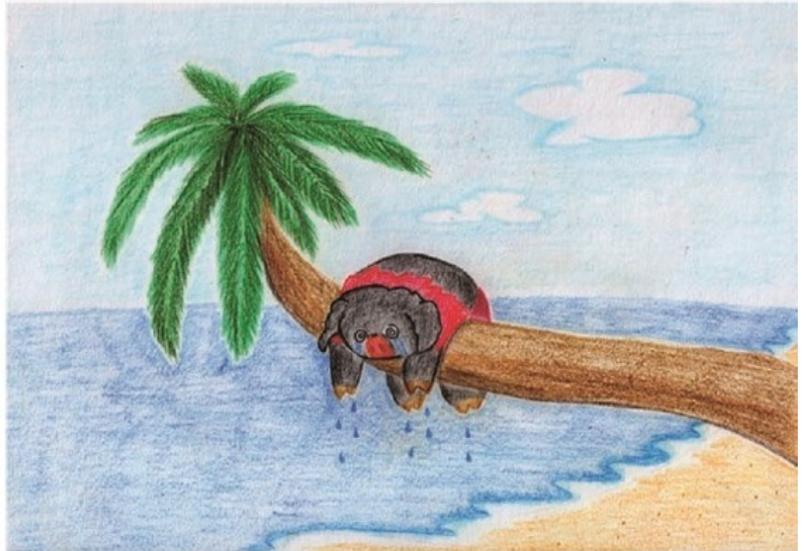
人間が、
月へ行くようになり、
どこの誰とでも直接お話ができるようになり、
必要なモノを自分たちで作ることができるようになり、

そして
他の生き物と言葉を交わすことができなくなった今で
も・・・・・・・・



サンゴや星の砂は、静かに笑いながらこの島の
地面を作り続けているそうです。

おしまい





文：いで よういち

絵：まつだて ふみこ

笑顔の島の作り方

<http://p.booklog.jp/book/98667>

著者 : Foram Sand

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/fumiko325/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/98667>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/98667>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ